



吉野川第一期改修百周年に向けて⑬

-吉野川下流域における古地理の歴史的変遷-

徳島大学名誉教授 平井 松午



1. はじめに—『四国地方の古地理に関する調査報告書』の紹介

今回から「吉野川歴史探訪」を担当します平井と申します。専門分野は歴史地理学で、古地図や絵図などを利用して地域の成り立ちやその変容過程などを調べています。吉野川との関わりでいえば、吉野川を描いた古地図の紹介（平井1998）や洪水と葉藍作との共生関係（平井2018）などについて報告してきました。また、四国地方整備局が主催している吉野川学識者会議にも参加してきました。

今回の「歴史探訪」では、国土交通省の四国地方整備局と国土地理院が平成15年（2003）3月にまとめた『川と人との歴史ものがたり—四国地方の古地理に関する調査報告書』などを参考に、第一期改修工事（1907～27年）以前における吉野川下流域の古地理について歴史地理学的な視点から考えてみたいと思います。

この古地理調査報告書では、四国の一級河川（吉野川など8河川）流域の地質・地形環境や洪水の歴史、土地利用の変遷などについて地図・図表・写真などで紹介されていますが、付属のCD-Rにはそれらの事項に関わる各種情報がGISデータとして収録されています。これらのデータの多くは、明治期以降の旧版地形図・地形図などから得られたGISデータ（ポイント・ポリライン・ポリゴン）ですが、なかには江戸時代の国絵図や歴史の道調査報告書、遺跡調査報告書などにもとづく情報も含まれています。データは極めて多岐にわたりますが、その主な項目を以下にあげておきます。

- ・「01海岸線」（縄文海岸・江戸・明治・昭和・平成）
- ・「02河道形状・河川構造物」（河道・堤防・取水堰：江戸・明治・昭和・平成ほか）
- ・「03氾濫災害」（浸水区域）
- ・「04湖沼・湿地」（奈良平安・江戸・明治・昭和・平成）
- ・「05土地利用」（塩田・干拓・市街地：江戸・明治・昭和・平成、荘園ほか）
- ・「06遺跡」（旧石器・縄文・弥生・古墳・奈良平安、霊場・水辺88カ所ほか）
- ・「07交通」（道路：江戸・明治・昭和・平成、遍路道、鉄道：明治・昭和・平成、渡し：明治・昭和、舟運、川湊ほか）
- ・「08地形・地質」（地形分類図、地質、活断層ほか）
- ・「09その他」（河川流域界）

GISデータの多くは日本測地系で作成されていますが、GISソフト上で河川流域の地形環境や河川形状・土地利用などを把握するにはとても便利です。この四国地方の古地理調査には筆者も協力させていただいたことから、今回改めて、この時の調査データの紹介も兼ねて、吉野川流域の古地理の復原を試みたいと考えた次第です。

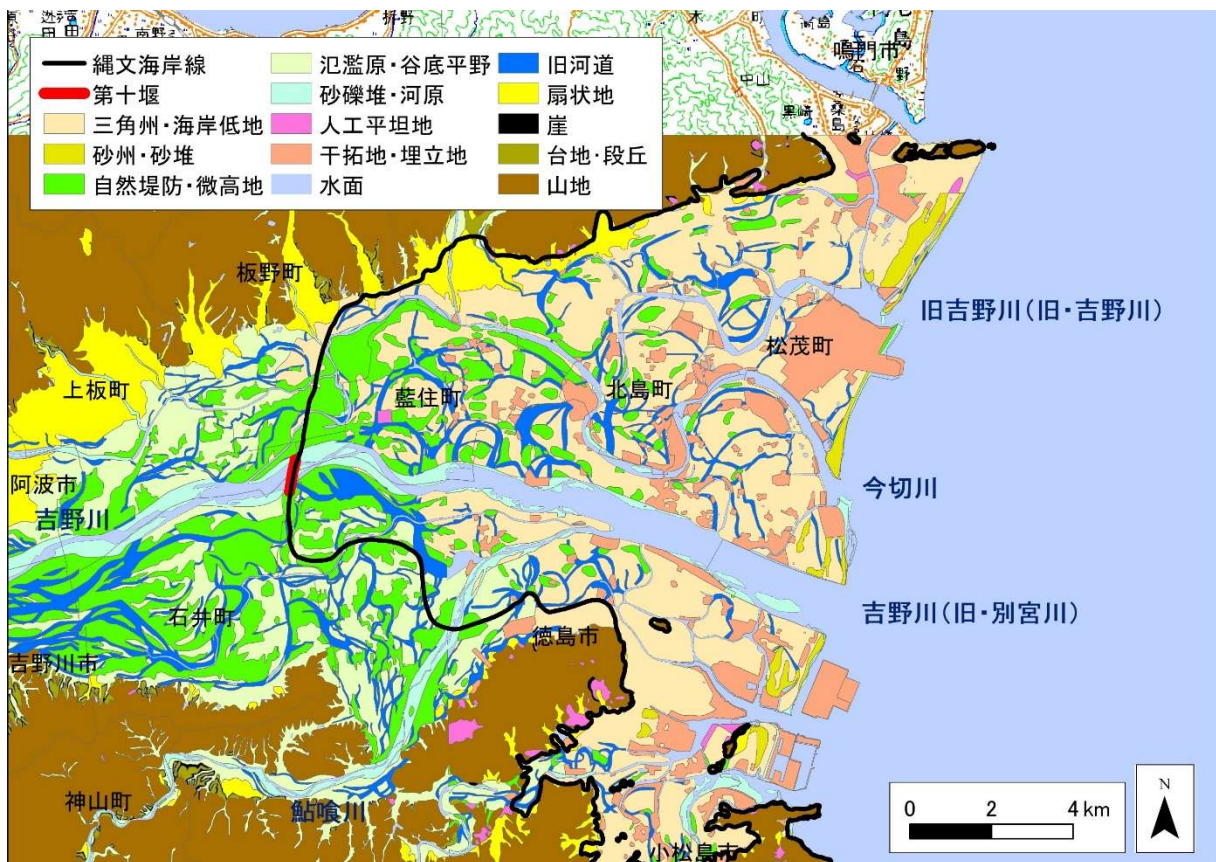
なお、以下では上記の各種情報のほかに、国土地理院が提供している基盤地図情報の「数値標高モデル」5mメッシュデータ（DEM）を用いて時代別に海岸線の位置（標高）を推

定しています。ただし、5mDEMデータは現在の地表面をベースとしているため、嵩上げされた堤防高や干拓地・埋立地・住宅団地・大型施設・道路などの地面高も標高数値に含まれています。そこで今回の古地理の復原では、近代以降に嵩上げされたとみられる箇所については、明治29年（1896）測図の縮尺5万分の1旧版地形図などを参考にこれらのDEMデータの数値を適宜変更しています。他方、第一期改修工事以降、吉野川（当時の別宮川）は拡幅・浚渫されているため、河道内における標高データや地物の復原は困難になっています。標高データの修正や復原作業については今後さらに検討が必要ですが、こうした手続きをとることで、吉野川下流域における古地理の変遷をある程度推測することが可能となります。

2. 吉野川下流域の地形分類と縄文時代の海岸線

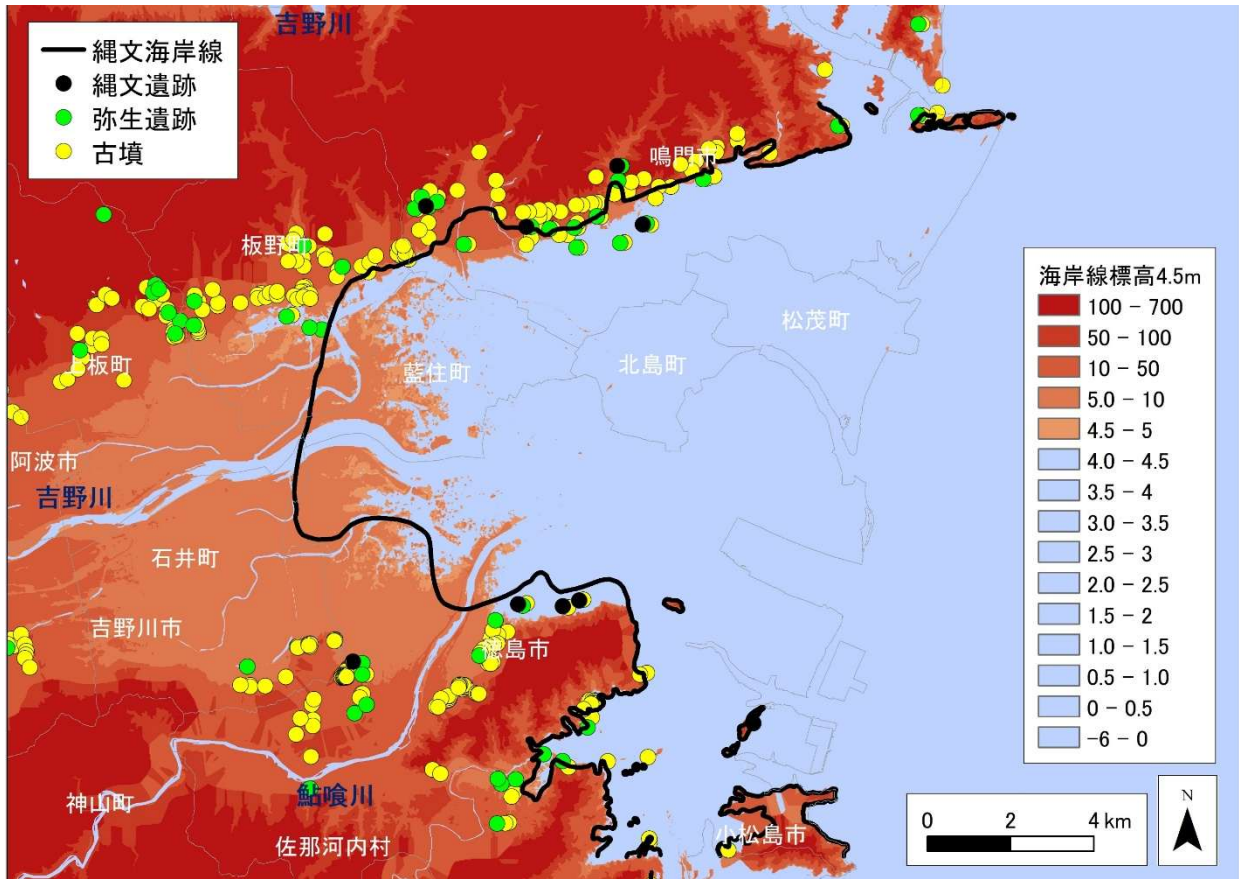
【図1】は、吉野川下流域における縄文海進時の海岸線（汀線）の推定位置と古地理データの地形分類図にもとづいた地形区分を示しています。基図の地形分類図は昭和46・62年（1971・87）版とやや古いですが、土地条件図や水害地形分類図、治水地形分類図なども公開されていますので、それらも参考にしてください。

約6500～6000年前（縄文前期～中期）の日本列島は平均気温が現在よりも2～3度高く、狩猟採集生活が営まれていました。地球規模での温暖化により大陸氷河や谷氷河が融けて平均海面（海水準）が上昇した結果、当時の海岸線は現在の標高5m付近に位置し、第十堰付近まで海岸線が達していたとみられます（古田2005：246-261頁）。



【図1】吉野川下流域の地形分類図

基図：1971年発行（経済企画庁）5万「川島」図幅、1987年発行（徳島県）5万「徳島」図幅ほか。



【図2】縄文海進時における吉野川下流域
 基図：徳島県文化財基本図（徳島県教育委員会）1988年。

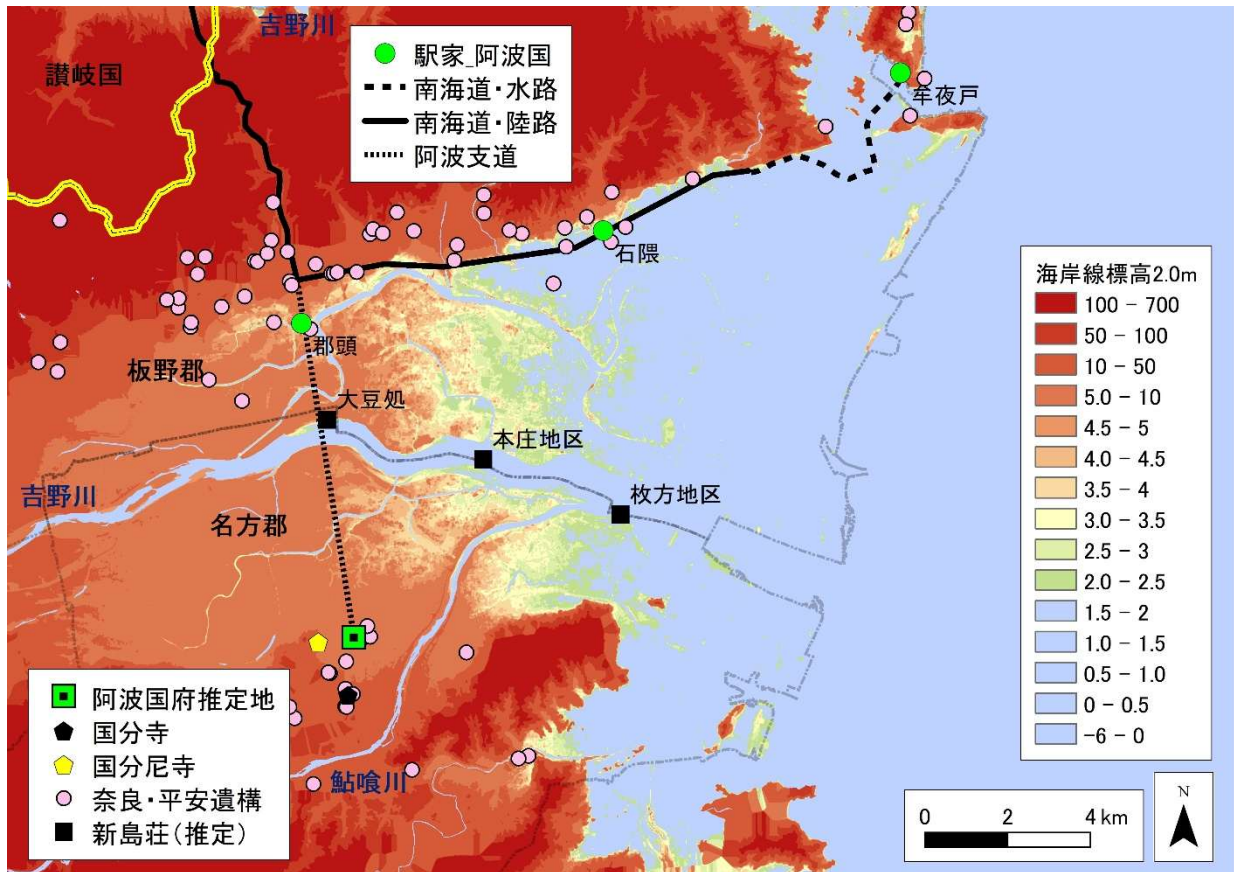
海岸線が現在の汀線よりもかなり内陸に入り込んでいたため、こうした現象は「海進」と呼ばれます。その後、弥生時代に寒冷化が進んだことで、今度は逆に海岸線が海側に後退する「海退」という現象が起き、その後も気候変動や土砂堆積、沿岸流の影響もあって海岸線の位置と形状は変化していきます。

【図1】によれば、縄文海進時の海岸線付近から上流側には自然堤防が卓越し、下流側に泥質な三角州（デルタ）が形成されています。水はけのよい砂質壤土からなる自然堤防は、「阿波国」名の由来となる粟や阿波藍（葉藍）の栽培適地となりました。これに対して、土砂堆積が進んだデルタ地帯と紀伊水道沿いに列状に発達した沿岸州（砂州・砂堆）との間には内湾状のラグーン（潟湖）が形成され、近世以降に新田開発が進みました。

このような地形環境を反映して、貝塚などの縄文遺跡は主には縄文海進時の海岸線付近に分布し、現在の松茂町や北島町、さらには徳島市や鳴門市の平地部は海面下にありました【図2】。紀元前10世紀～後3世紀中頃の弥生時代になると、居住域は内陸の山麓部に広がります。古墳も吉野川北岸や南岸の山麓部に集中していますが、吉野川沿いにはこうした遺跡・遺構の分布はほとんどみられません。これは、頻発する洪水氾濫のために吉野川沿岸が当時はまだ居住適地ではなかったことを物語ります。

なお、現在は吉野川の支流となっている鮎喰川は、当時は吉野川とは別の水系をなし、下流部（現在の徳島市国府町・名東町付近）に低平な三角州性扇状地を形成しています。

3. 古代・中世における古地理の変遷



【図3】古代における吉野川下流域

南海道のルート、駅家や新島荘の位置は木原（2011）、島方ほか編（2012）などを参考とした。石隈駅を9世紀の成立とする説もある（丸山1999）。

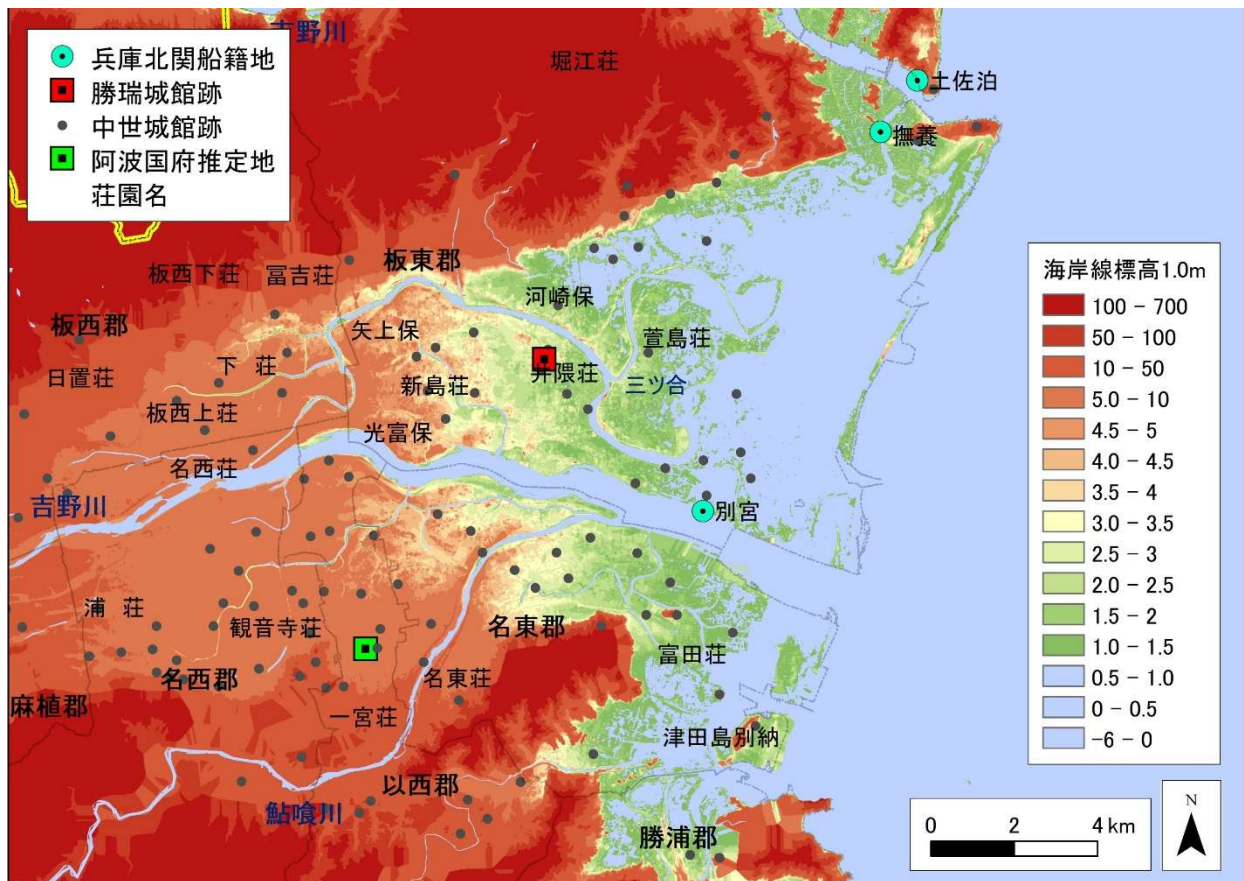
次に、奈良時代8世紀頃の様子をみたいと思います。古代には阿波国が成立し、現在の徳島市国府町中・観音寺地区付近に阿波国府が置かれます【図3】。都の平城京と阿波国府とは、郡頭駅付近で分岐する阿波支道を介して古代官道の南海道で結ばれていました。また、天平勝宝8年（756）には東大寺所領の新島荘が吉野川下流に成立します。新島荘の土地約43町歩（約51ha）は、本庄地区・枚方地区・大豆処の3ヶ所に分散していました。東大寺には「阿波国名方郡大豆処図」という古代荘園図が残されていて、この荘園図に描かれた阿波支道や名方郡・板野郡境界の所在から、「大豆処」は現在の藍住町祖母ヶ島付近と推定されます（木原2011）。ちなみに、この荘園図で南北方向に流れる「大川」はのちの吉野川とみられ、「大豆処」は「第十」という地名に転化したともいわれています。

また弥生海退以降、吉野川河口部での土砂堆積により海部の陸化が徐々に進んでいることから、【図3】では標高2mを目安に当時の海岸線を想定してみました。その結果、本庄地区や枚方地区は当時の吉野川や鮎喰川の河口付近に位置していたと推定されます。新島荘の大半は現在の吉野川の河床や河川敷になっていますが、藍住町徳命の新居須地区や対岸の徳島市不動地区（旧・新居村）は新島荘の一部と考えられています。

中世鎌倉期以降には吉野川河口付近の土砂堆積がさらに進み、12世紀には現在の北島町あたりに萱島荘、13世紀初頭には現在の徳島市街地付近に富田荘が成立してきます【図4】。

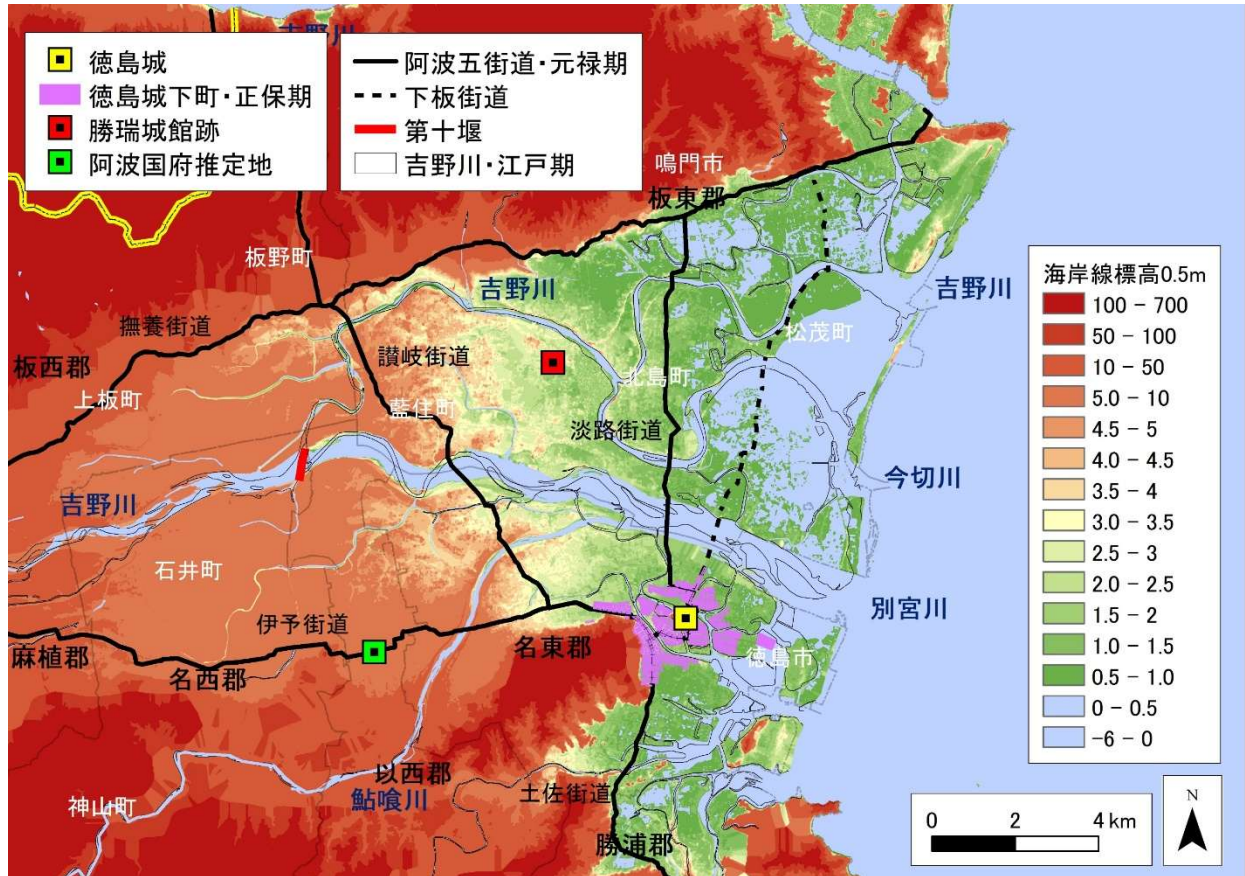
建仁4年（1204）9月の春日神社領「阿波富田荘立券文案」（鎌倉遺文）によれば、富田荘の四圍榜示（荘域）は、東が「津田西江并北海」、南が「八万堺勢因峰」（読みは「せいみ」カ）、西が「名東庄堺」、北が「吉野河」とされます（福家1996）。本文書に出てくる「吉野河」は吉野川の川名が確認できる最初の文書とされますが、この「吉野河」は近世以降は「別宮川」とも呼ばれました。

他方、15世紀には阿波国守護の細川氏が拠点を入陸部の秋月（現・阿波市土成町）から吉野川河口に近い勝瑞（現・藍住町）に移します。また、15世紀中葉の「兵庫北関入船納帳」には土佐泊、撫養、別宮の湊が確認でき、これらの湊から吉野川流域で生産された米麦・藍・胡麻といった農産物が兵庫北関（神戸市）経由で畿内に搬出されていました。しかし、16世紀中葉には阿波細川氏の被官（家臣）であった阿波三好氏が細川氏を下克し、同じ勝瑞の地に三好館を置きました。標高1m付近を当時の海岸線に比定した【図4】では、当時の勝瑞城館や中世城館の位置を示しています。阿波細川氏や阿波三好氏が勝瑞に拠点を設けたのは、同地が吉野川（現・旧吉野川）と今切川とが分岐する三ツ合に位置する吉野川水運の要衝「勝瑞津」に隣接していたことが理由の一つに考えられています（福家2017）。



【図4】中世における吉野川下流域
中世城館跡は徳島県教育委員会編（2011）などによる。

4. 近世における阿波五街道と船



【図5】近世における吉野川下流域
阿波五街道・下板街道のルートは平井（1999）による。

天正13年（1585）の羽柴（豊臣）秀吉による四国平定戦後、蜂須賀家政が阿波国主として入部し、猪山（渭山）に徳島城を築城するとともに領内9ヶ所に支城（阿波九城）を設け有力家臣を城番として配置しました。こうした城番制による分領支配体制は、徳島藩二代藩主の蜂須賀忠英の治政下で藩主直仕置制による領国支配へと移行していきます。その結果、正保年間（1640年代）には隣国との境に国境番所を設け、徳島城と連結する阿波五街道が整備されます【図5】。近世初頭には徳島～撫養（鳴門市）を結ぶ淡路街道が最も東寄りの主要街道でしたが、近世後期になると下板街道も利用されるようになりました。

17世紀初頭に吉野川の河口はおおむね現在の海岸線近くに到達したとみられますが、河口付近には紀伊水道の沿岸流により南北方向に延びる沿岸州が形成され、その内側にはラグーン（潟湖）が広がっていました【図5】。内湾部は水深が浅い沼沢地を呈していて、近世期を通じて盛んに新田開発が行われました。宝暦2年（1752）には新田地帯への農業用水を確保するために第十堰が築造されますが、第十堰以東の別宮川（現・吉野川）は蛇行を繰り返して紀伊水道に注いでいました。

なお吉野川流域の北方地方では、物資の移動には主に川舟が利用されていました。吉野川（現・旧吉野川）には「船船」（平田舟）と呼ばれる八端帆・十二端帆の川船が行き交い、流域の各所に「浜」と呼ばれる川湊が整備されました【図6】。



艀船



「池田古図」(部分)



池田本町の卯建の町並み



千五百浜

【図6】艀船と池田の千五百浜

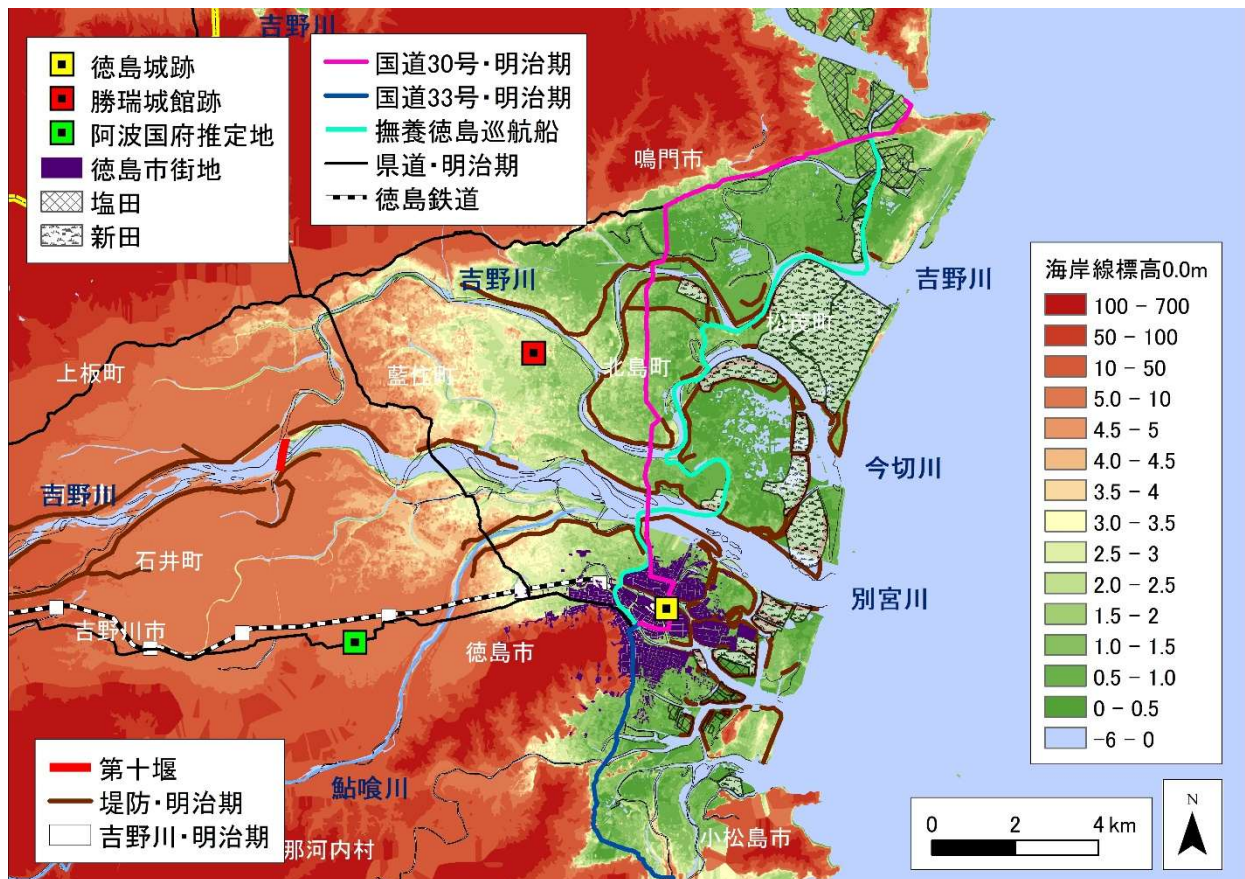
艀船は8～12枚帆からなる長さ13m・幅2mほどの川船で、池田～徳島間を上り（塩・肥料・日用雑貨）に7～10日、下り（炭・煙草・楮・藍など）に3日を要した。写真は昭和初期（出典：写真集吉野川今昔編集委員会『写真集 吉野川今昔』吉野川文化研究会、1998年）。

池田（三好市）の千五百浜は吉野川の川湊で、伊予街道と交叉する阿波池田は卯建の町並みとして繁栄した。「池田古図」は江戸後期、個人蔵、三好市教育委員会提供。写真は平井撮影。

5. 明治期における吉野川と近代交通

【図7】では、縮尺5万分の1の旧版地形図「徳島」図幅などを参考に明治29年(1896)頃の吉野川下流域の様子を示しています。当時の吉野川本流（現・旧吉野川）は第十堰付近で北流し、粟津港（鳴門市）が位置する^{あわづ}広戸口で紀伊水道に注いでいました。吉野川本川や派川の^{いまぎれ}今切川・別宮川の沿岸では堤防の嵩上げ工事も行われていましたが（本誌Vol.18）、無堤地区も多く大規模な洪水のたびに流域一帯は冠水していました。洪水対策を目的とした本格的な堤防の完成は、吉野川第一期改修工事の完工を待つこととなります。

他方、河口部の内湾では近世～明治初期に塩田や新田が造成され、現在これらの干拓地には工場や住宅地、飛行場なども進出しています。また、明治25年には吉野川下流域の内陸水路を利用して撫養・徳島間に発動機船による巡航船が就航し、昭和初期まで運行されました（本誌 Vol.52）。明治32年2月には寺島駅（現・徳島駅）～鴨島駅間に徳島鉄道が開通、その後も小松島軽便線や阿南鉄道、阿波電気軌道が相次いで開設され、国道の整備と相俟って、吉野川の^{しゅうりょう}舟運は陸上交通に取って代わることとなります。



【図7】明治期における吉野川下流域

徳島市街地データは明治3年（1870）頃の「阿州徳島城下絵図」（徳島県立博物館蔵）をもとに作成。

【主な参考文献】

- 木原克司(2011):古代阿波国吉野川下流域の歴史的景観—条里呼称、道路網、東大寺領新島荘の位置比定と阿波国府の構造を中心に—、徳島地理学会論文集 12、65-79 頁。
- 島方洸一ほか編(2012):『地図で見る西日本の古代』平凡社。
- 徳島県教育委員会編集・発行(1999):『徳島県歴史の道調査報告書 第一集 讃岐街道・淡路街道』(古代・中世の解説:丸山幸彦、近世・近代の解説:平井松午が担当)。
- 徳島県教育委員会編集・発行(2011):『徳島県の中世城館 : 徳島県中世城館跡総合調査報告書』。
- 平井松午(1998):「吉野川の河川環境と流域史」『絵図にみる吉野川』(東 潮編『川と人間—吉野川流域史—』溪水社)3-25 頁, 294-319 頁。
- 平井松午(2018):吉野川流域の竹林景観と藍作—洪水との共生—(地方史研究協議会編『徳島発展の歴史的基盤』雄山閣)109-124 頁。
- 福家清司(1996):阿波国名方郡新島荘図・大豆処図(金田章裕ほか編『日本古代荘園図』東京大学出版会)509-528 頁。
- 福家清司(2017):勝瑞津と聖記寺の創建(石井伸夫ほか編『守護所・戦国城下町の構造と社会』思文閣出版)193-214 頁。
- 古田昇(2005):『平野の環境歴史学』古今書院。